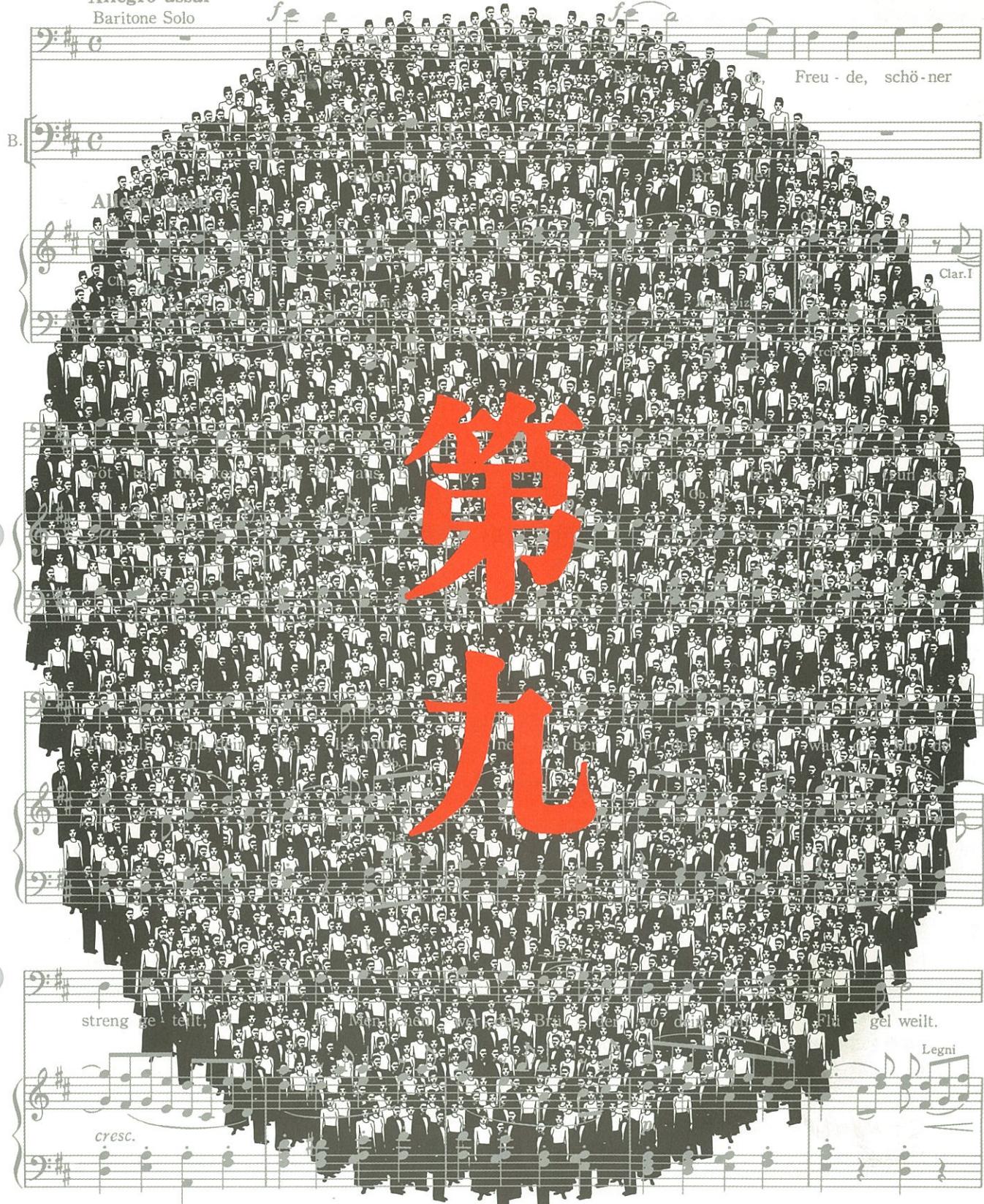


Allegro assai
Baritone Solo



'94春日井市民第九演奏会

とき 1994.12.11 SUN 午後3時開演

春日井市民会館

主催 春日井市、春日井市教育委員会、「94春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中部大学女子短期大学、中日新聞本社

ごあいさつ



春日井市長 鵜飼一郎

本日は、「'94春日井市民第九演奏会」にようことお越しくださいました。

昨年12月5日、市制50周年のフィナーレを飾り、春日井で初めての第九演奏会が開かれました。アンコールでは、興奮と熱気に包まれた場内が総立ちになり、3,600人もの聴衆が全員で「歓喜の歌」を歌い、未来への喜びの歌声を響かせました。

演奏会の終了後、市民の皆さんから、「ぜひ、あの感動をもう一度・・・」という声が多数寄せられました。そこで、市民による春日井第九合唱団が発足し、市民の手による演奏会が企画されたのです。魅力ある市民文化の創造をまちづくりの一つの柱としているわが市にとりましては、誠に喜ばしいことであり、心強く思います。

生の音楽とりわけ音楽史上の傑作である第九にふれ、雄大な演奏に感動を覚えることは、生活にゆとりや潤いをとりもどし、豊かな心を育むこととなるでしょう。

難曲とされる第九に取り組まれ、様々なご苦労があったかと思いますが、今日にいたるまでの、春日井市交響楽団と春日井第九合唱団の皆さんを始め、関係の皆さんの多大なる努力と熱意に心から敬意を表します。

今日の演奏会を契機として、さらに市民の皆さんの音楽活動が活発化し、市民文化の一層の向上が図られますよう念願しております。

それでは、竹本泰蔵さんを指揮者にお迎えし、オーケストラも合唱も春日井市民による手づくりの第九演奏会をじっくりとお楽しみください。



'94春日井市民第九演奏会実行委員会会長

中部大学長 山田和夫

昨年の市制50周年記念の春日井《第九》演奏会は、いまだに私の心をゆさぶるほど感動的でした。その感動を受けて、私たち《第九》ファンがまた集まって、本日の演奏会を開くことになりました。

「感動よ、再び！」ですが、今年は、昨年の《第九》春日井初演の「大きな感動」に、また新しく「深い感動」が加わることでしょう。それは、ベートーヴェンとシラーの芸術の偉大さからくる感動であり、天にもとどけと大声で歌う二百名の仲間の姿から、また一生懸命に楽譜に向かう八十名のオーケストラの姿からやってくる感動であることでしょう。

さらに、《第九》演奏の前に、菰田なお子さんの新作交響詩《春日井の四季》を初演することができました。フル・オーケストラによる都市賛歌で幕を開ける——これは、数ある《第九》演奏会の中でも、音楽都市春日井ならではの試みと自負しております。

このように多くの感動を秘めた画期的な《第九》演奏会が開催できますのも、格別のご援助を賜った春日井市、また、ご支援いただいたたくさんの市民のみなさまのおかげと存じます。指揮者の竹本泰蔵氏、松波千津子・竹田弥加・江端智哉・クラウス・オッカーのみなさま、合唱指揮の吉川朗氏に、そして、トレーナーのみなさまにお世話になりました。ここにあわせて感謝申し上げます。

そして、本日お集まりのみなさまにも心からお礼申し上げたいと存じます。

それでは、みなさまと多くの感動をわかち合いながら、と一緒に春日井の《第九》を楽しみたいと思います。どうか、ごゆっくりお聴き下さい。

プログラム

菰田なお子作曲

交響詩「春日井の四季」(初演)

〈休憩〉

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN(1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱つき」

第1楽章 アレグロ マ ノン トロッポ, ウン ポコ マエストソ
Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
Molto vivace

第3楽章 アダージョ モルト エ カンターピレ — アンダンテ モデラート — アダージョ
Adagio molto e cantabile — Andante Moderato — Adagio

第4楽章 フィナーレ, プレスト — アレグロ アッサイ
Finale, Presto — Allegro assai

指揮 竹本泰蔵

ソプラノ 松波千津子 アルト 竹田 弥加

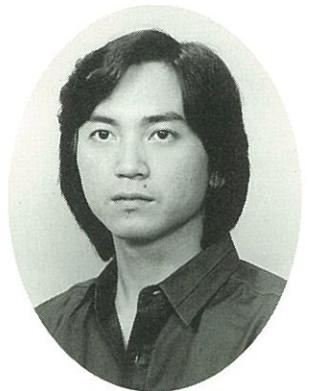
テノール 江端 智哉 バリトン クラウス・オッカー

音楽監督 都築正道 合唱指揮 吉川 朗

管弦楽 春日井市交響楽団

合唱 春日井第九合唱団

プロフィール



指揮者
竹本泰蔵
たけもと たいぞう

1956年神戸生まれ。1974年、京都市立芸術大学音楽学部作曲科に入学し、翌年指揮科に転科、その間、広瀬量平、阿部幸明、保科洋、及び山田一雄の諸氏に師事。1976年、名古屋フィルにヴィオラ奏者として入団。1977年、カラヤン・コンクール・イン・ジャパンでベルリンフィルを指揮、第2位に入賞。1978年、日本ユースシンフォニーの指揮者としてロンドンでデビュー。同年、カラヤンの招きによりベルリンフィルで2年間研修を行い、親しい指導を受ける。1981年の名古屋フィルアシスタントコンダクター就任を経て、現在、コンサート、オペラ、バレエ、ミュージカルの公演指揮の他、編曲、ラジオ番組でパーソナリティーを務めるなど多方面に活躍中。



ソプラノ
松波千津子
まつなみ ちづこ

愛知県立芸術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了。在学中から国内外の作曲家作品発表において新作を多く初演する。ミュージカル「かぐや姫」をはじめ、オペラ「フィガロの結婚」(スザンナ)、「コシ・ファン・トゥッテ」(フィオルディイリージ)、「修善寺物語」(かつら)、「唐人お吉」(お吉)、「春琴抄」(春琴)、「蝶々夫人」(蝶々夫人)、(平成5年度愛知県文化振興事業団・日生劇場主催)等、多くのオペラに出演、好評を博す。ソロリサイタル・ヘンデル「メサイヤ」、モーツアルト「戴冠ミサ」、ブラームス「ドイツレクイエム」、ブラング「グローリア」、バッハ「カンタータNr.147」シーケンス「ミサ曲」等のソプラノソロ、ベートーベン「第九」のソロとして数多く出演し、幅広い分野で活躍中。第53回日本音楽コンクール第3位入賞、昭和62年度文化庁国内芸術家研修員修了。1992年世界マダムバタフライコンクール(スペイン)日本代表として出演。水野俊彦、故平田黎子、東敦子、大下久見子、ロゼッタ・エリーの各氏に師事。現在名古屋芸術大学、加納高校音楽講師。全日本学生音楽コンクール審査員。名古屋オペラ協会、芸術協会会員。



合唱指揮
吉川朗
よしかわ あきら

愛知教育大学音楽科卒業。同大学院(作曲)修了。あいばの合唱団、豊田ひまわりコーラス、大高北PTAコーラスを始め、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団などのオペラの正指揮、副指揮を務める。名古屋シティ管弦楽団や一宮の“第九”的合唱指導にあたっている。

名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。



アルト
竹田弥加
たけだ みか

武蔵野音楽大学卒業。愛知県立芸術大学大学院修士課程修了。西ベルリン留学。故鶴嶋良三、故平田淑子、小島琢磨、水野俊彦、金光良美、イルムガルト・ハルトマン=ドレスラー、ホルスト・ギュンターの諸氏に師事。カトリック五反城教会でのレオ・クレマー氏との共演をはじめ、ヴィリー・ゴル指揮、東京ルミエール管弦楽団と“戴冠ミサ”、東京イノホールにて、前田幸一郎指揮、東京ゾリストンとベルゴレージ・ヴィヴァルディ・テレマンを、東京バリオホールにて、バッハ、カンタータ第35番を伊藤栄一指揮、ニューコンセール合奏団と共に。ナゴヤシティ管弦楽団とは、亡き子をしのぶ歌(マーラー)・夏の夜(ベルリオーズ)を共演。1990年より、「谷上セツ子 竹田弥加二重唱のタベ」を開催し、今年が第5回。他モーツアルト、ハイドン等宗教曲のソリストをつとめる。オペラ「ヘンゼルとグレーテル」等に出演。現在、武庫川女子大学非常勤講師。名古屋二期会会員。



テノール
江端智哉
えばた のりちか

名古屋芸術大学音楽学部声楽科卒業。
歌劇「椿姫」(アルフレード)、「蝶々夫人」(ピンカートン)、「ジャンニ・スキッキ」(リヌッチオ)、「トスカ」(カヴァラドッシ)、「ラ・ボエーム」(ロドルフ)、「カルメン」(ドン・ホセ)、「メリー・ウッドウ」(カミーユ)、「トゥーランドット」(カラフ)、等、多くのオペラやオペレッタに出演。マダムバタフライ世界コンクール記念演奏会、世界デザイン博覧会“ヴォーカルコンサート”等、数々の演奏会に出演。
ベートーヴェン「第九」、モーツアルト「レクイエム」、ウォルフ「カルミナ・ブランナ」、ブルックナー「テ・デウム」等数々の合唱曲、宗教曲のソリストを務める。
V.マスネヴァ・ブレチコヴァ、G.ディ・ステファノ、G.ベーキ各氏の特別声楽講座に招かれディプロマ修得。イタリア声楽コンクール数回入選。水田哲男、故栗本 正、中島基晴、佐藤康子、M.コントレーラスの各氏に師事。



バリトン
クラウス・オッカー

1923年ドイツのブレーメンに近いフェルデンのアレルに生まれ、ブレーメンで学んだ後、ハンブルク音楽大学を卒業。'52年ジュネーブ国際コンクールで銀賞受賞。後、コンサート歌手としてヨーロッパ各国で演奏活動や録音活動を行う。オラトリオやドイツ歌曲を、ピアノ伴奏やオーケストラと協演する。'66年にはアラビア諸国にてコンサートを行い、翌年にはロンドン・パリにてリヒャルト・シュトラウスの3つの遺作歌曲を初演。'68年には日本を始め東洋諸国で精力的に演奏旅行を行い好評を得る。'70年~'75年ブレーメン音楽院で教鞭をとり、'75年来、ハンブルク音楽大学教授になる。また、ハンブルク大学にて音楽理論やドイツ言語学を、同大学付属病院では、音声障害について、専門家と研究する。'87年渡米、カルフォルニア・サンホセ州立大学、'90年には中国の北京大学の客員教授になる。'91年4月から2年間愛知県立芸術大学客員教授を務める。'92年9月に名古屋、京都にてチャリティ・コンサートを開催。



春日井市交響楽団 第3回定期演奏会 H.6-7-17 春日井市民会館

管弦楽 春日井市交響楽団

平成2年11月、春日井市の市民アマチュアオーケストラとして設立。以来、創立記念演奏会(平成3年1月)・第1回定期演奏会(平成4年1月)・第2回定期演奏会(平成5年1月)など毎年自主演奏会を開催している。平成5年12月、春日井市制50周年記念「第九演奏会」(指揮:石丸 寛)には128名の特別編成の大オーケストラで参加した。平成6年7月、第3回定期演奏会では竹本泰蔵氏の指揮によりチャイコフスキイ作曲交響曲第5番他を演奏し好評を得た。定期演奏会の他、演奏旅行、音楽教室や市役所でのコンサートなど活発に演奏活動を行っている。愛称「カボ」は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったものである。



春日井市制50周年記念「第九演奏会」 H.5-12-5 春日井市総合体育馆

合唱 春日井第九合唱団

昨年(平成5年)12月の春日井市制50周年記念「第九演奏会」に出演した合唱団員を中心に、この夏、結成された混声合唱団。団員数は180名。吉川朗先生の指導で、改めて今回のベートーヴェンの「第九」に挑戦する。カボ同様春日井市民に愛される音楽活動を目指している。

音楽監督 都築正道(つづきまさみち)

名古屋市生まれ、名古屋大学文学部美学科卒。文博。指揮を横井園生氏に、作曲を熊谷賢一氏に、声楽を故山田昌弘氏に師事。朝日新聞音楽評担当。春日井市をはじめ、イタリアやフランスの国際コンクールの審査員を務める。現在、中部大学女子短期大学教授。

春日井市交響楽団音楽監督。



交響詩《春日井の四季》初演

菰田 なお子作曲

私たちの街「春日井」は、いつも美しく輝き、若き生命にあふれ、日々、英雄を生んでいます。目をつぶれば、あなたは交響詩《春日井の四季》によって、そのすべてを見ることができるでしょう。

春

暖かな春の光を受けて
高座山(たかくらやま)の桜が花開く
淡い春霞の奥に幻想の世界が生まれ
桜の精が私たちに恋をささやく
「今日のあなたはとても華やかだ」

桜のトンネルに歓声がこだまする王子製紙

音域の広い合唱団の発声練習
——春日井ファミリー遊園地

「新緑がまぶしいの」
——ふれあい緑道を歩く
あなたの顔はルノアール



高座山の桜

夏

ハープとフルート

強い光が落合公園の夏を燃やす
噴水の水は
ふりそそぐ水晶の宝冠となって
あなたの髪を飾る

君は亀の子
あの子はかいつぶり
市民プールは
今日も元気な子供たちで沸き立つ

深い緑に隠れた岩屋不動
不動の滝は
あなたの手を浄(きよ)め
身体を浄め
心を浄め
すべての時を浄める

落合公園

トランペットの水しぶき

小太鼓の先導で裸の行進

フルートとオーボエの滝の音
ハープのごだま
ティンバニの不気味な響き
ヴァイオリンの鳥が飛ぶ



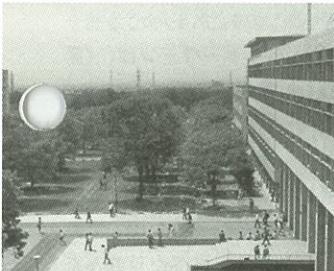
不動の滝

秋

「お元気ですか
今年も中部大学のキャンパスに
櫻(けやき)の葉が美しく散っています
虚飾なき木は
天に向かって両手を広げ
ほら、あなたの無垢の未来を
祝福しています
また会いにきて下さい…」

秋のさわやかな風は
かれんなコスモスにも
エールを忘れない
祭のパレードは春日井の街の笑う大砲だ
ズダズダズダ…
ズダズダズダ…

玉野川渓谷の紅葉よ
決して散り急いではいけない
新しい命を育むためでも…
哀しみは内々の杜からきたるなり
落ち葉の絵は書き捨てにして…



中部大学

ハープとフルートの下降音型
チラチラと散る木管の重奏
クラリネットのデュエット
ソプラノとコーラングレの
オブリガート

フルートとオーボエの対話
木管のアンサンブル
小太鼓とトランペットの行進

ハープの風に舞うフルート
コーラングレが郷愁を誘う



春日井まつりのパレード

冬

クリスマス・ツリーが
春日井の街を虹色に染めて
街を行き交う人々は
七色のはずんだ声で
一年の幸せを語る
初日の出が年々歳々相似たるも
円福寺に詣るあなたの姿は
歳々年々同じからず

「ドーン！」と号砲がなった
さあ、ランナーが一斉に飛び出した
知命の街に
初春の命を吹き込む一群の風が
駆け抜ける

ファンファーレが勝利者を讃え
新しき英雄たちの誕生を告げる
そこにあなたがいる
そこに私がいる
あなたと私の街「春日井」
小さな英雄たちの街「春日井」

そりのベル
クリスマス・ツリー
春日井の街を虹色に染めて
街を行き交う人々は
七色のはずんだ声で
一年の幸せを語る
初日の出が年々歳々相似たるも
円福寺に詣るあなたの姿は
歳々年々同じからず

フルートとオーボエの輝かしい光
それを反射する弦楽器
フルートとクラリネットが先頭を切る
それにつづくオーボエとファゴット
弦楽器も負けてはいない
金管が隊列を組んで追う

ファンファーレによるクライマックス



マラソン大会

作曲者
菰田 なお子

名古屋市出身
愛知県立芸術大学音楽学部・同大学院を卒業・修了
作曲を石井 欽・小林秀雄・兼田 敏・松井昭彦の各氏に、師事
ピアノを佐々木仔利子・吉村 民・八重口敬子の各氏に師事

美しい四季に寄せて、私たちの愛する春日井とそこに生きる私たちの幸せな日々を歌いあげたこの交響詩は、この春、「アーバン春日井」が春日井市のイメージ映像作成のために菰田なお子さんに依頼した委嘱作品であり、今回はその初演です。

[楽器編成]

フルート2・オーボエ2・コーラングレ・クラリネット2・ファゴット2・ホルン2・トランペット2・トロンボン2・ティンバニ・小太鼓・大太鼓・トライアングル・ソリベル・ハープ・ソプラノ・弦楽5部
(都築正道)

曲目解説

言わねばならぬこと

ベートーヴェンからのメッセージ

音楽監督 都築正道

異端の交響曲

ベートーヴェンの《第九交響曲》は、終楽章に4人のソリストと合唱が入った異端の交響曲です。「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」といえば、この《第9番》が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は、彼の一連の交響曲の最終楽章でもあること大いに関係があると思われます。音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が（結果的にそうなったとしても）その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものになっている例は意外に多いです。ブラームスの《第4番》の終楽章（パッサカリア）、ブルックナーの《第9番》の終楽章（は、完成されなかったので《テ・デウム》）、チャイコフスキイの《悲愴》の終楽章（アーチージョ・ラメントーン）、マーラーの《第9番》の終楽章（アーチージョ＝フィナーレ）と並べてくれれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。無意識であっても、交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちに何か特別な、例えば、フロイト的な感慨をもたらします。それは、ひょっとすると、後世の私たちに向かれた作曲者からの直接の「遺言」（マニフェスト）なのではなかろうか——と思えるのです。

もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おう

特に、このベートーヴェンの《第9番》に終楽章こそ、正にベートーヴェンから私たちへ届けられた「メッセージ」であるといつていいくでしょ。例えば、その良い例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌いだされる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所が挙げられます。「おおわが友たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おうではないか」と歌うこの冒頭での呼掛けは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序詞です。この個人的な発言は、終楽章がベートーヴェンのマニフェスト（宣言文）であることをはっきりと現わしているといえましょう。

シラーの『歓喜の歌』とベートーヴェン

ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、8節からなるシラーの詩『歓喜に寄せる頌歌（しょうか）』『Ode an die Freude』なのですが、その中から人類愛を力強く賛えた語句を自由に抜粋して再構成したものでした。しかし、ベートーヴェンは、この《第9交響曲》の完成に先立つ31年も前に、一度、シラーのこの詩に作曲をしようと試みたことがありました。1792年（22歳）、その時彼はボン大学の聴講生でした。シラーの詩の初版時の9節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、『命名祝日』序曲（作品115）にこの合唱曲の流用を思っていたものの、結局、『歓喜に寄せる頌歌』の音楽化の企て

は実現しませんでした。その後も長い間、ベートーヴェンがこだわり続けていたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。でも、それは、時代をはるかに先取りしていたために、すべての人から理解され祝福された誕生ではありませんでした。

当時の人々にとってこの詩は、大衆になじみ深い宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリッヒ・シラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）の啓蒙思想やフリーメイソンの信念を語る現代詩であります。時の政権メッテルニヒの政策に反対する「危険なほどの民主主義思想が、宗教的な歌詞の中に入り込んだのである」（フリーダ・ナイト）といわれるほど、本質的には、政治的な主張を歌ったプロパガンダな詩なのです。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に、彼らが強い戸惑いを覚えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法でした。ベートーヴェン自身も、「この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いあって、いつか純粹音楽の終楽章を書こう」と弟子ツェルニーに語ったということです。

歓喜は神々の火花である

しかし、ベートーヴェンが、この暴挙をどれほど真剣に反省していたかは疑問です。結局、この改作案は実現されずに終りました。私は、このエピソードにもかかわらず、「ベートーヴェンは、最後の交響曲が理解されないままに終わることを恐れず、あくまでも言葉によるメッセージの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ」と思います。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果さねばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、シェーンベルクに尋ねました、「どういう訳でベートーヴェンは、《第9交響曲》を乱雑だといわれながらも、書きつけたのですか？」彼は言いました、「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ」。

正にその通りで、彼には言わねばならぬことがあったのです。冒頭の1節「歓喜は神々の火花である」がそれです。ここでの「歓喜」は、私たちが日ごろ思っているような、食べたり飲んだり遊んだりの「快樂」や「欲望」の結果としての「歓喜」のことではありません。詩をよく読んで見ますと、「欲望はウジ虫にくいでやった」という一節もあり、個人的な快樂や欲望をはっきり否定しています。シラーの言う「歓喜」とは、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感を言うのでしょうか。一人の友と眞の友になった人、一人の優しい女性を勝ち得た人、その人の心が自分のものだと言える人——こう言った人々こそ「歓喜」を知った人たちです。この歓びの感情を知った人たちだけが、兄弟となるのです。鉄と鉄がガスや電気のバーナーで何千度にも熱せられると、どろどろと溶けだしてお互いがくっ付くように、普段は別々の興味や考え方をもつ人たちでも、「子どもが生まれた」「オリンピックで日本人が優勝した」「ノーベル文学賞をもらった」となるとみんなが肩を抱き合ったりします。なにか共通の喜びがあれば、それが火

花となってすべての人の心を溶かし、一つに結びつけるのです。すなわち、「歓喜」は、「共通体験から生まれる感動」のことだといつていいくでしょ。本日のみなさまのように、年末に家族そろって『第九』を聴くのも、この「歓喜」を求めてのことだと思われます。

理想的な人類愛

さらに、「歓喜は、また、樂園からやってきた乙女だ。神々の火花によって、私たちが火のように酔うならば、そこで初めて歓喜の聖域に踏み込むことができるのだ」とシラーは歌います。「人類の心は、もともと一つであったのだ。それが、戦争や飢饉や恐慌や独裁といった時の流れで、今までの友が新たな敵となり、仲間が仲間に殺したり嘲ったり軽蔑したりするようになつたのだ」と。それほど激しく憎み合い、もう修復が効かなくなつた関係であっても、「歓喜はまた再び私たちの心を結び合わせてくれる。これを魔法の力と言わずして何といおうか！」とシラーは人類の心の底に流れる歓喜の力を力説しているのです。もちろん、これはベートーヴェンのマニフェストでもあります。すなわち、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感のことです。

さらに、彼はいいます——「歓喜とはなにか。それはこの世界で幸を見つけることをいうのだ。例えば、眞の友を得た人、優しい女性と結婚した人、だれかに確かに愛されていると感じる人こそ、歓喜を知る人なのだ。もしもあなたが、このどれも知らないのならば、私たちの仲間になることはできない。涙を流して去っていきなさい」と。

さあ、私たちは、このシラーとベートーヴェンのメッセージに対してどう答えればいいのでしょうか。それを、本日の演奏を聴きながら、一緒に考えてみることにいたしましょう。

作曲年代 1817年-1824年2月

初演 1824年5月7日 ケルントナートール劇場

献呈 プロシャ王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世

出版 1826年6月 マインツ市ショット社。総譜・管弦楽合唱パート譜・終楽章ピアノ版総譜出版

楽器編成 Fl.Ob.Cl.Fg.（第4楽章でコントラ・ファゴットが加わる）。Trp.（第2・第4楽章にはトロンボン3が加わる）。以上各2。Hrn.4.Tim.（第4楽章にはトライアンブル、シンバル、大太鼓が加わる）。弦5部。ソプラノ、アルト、テノール、バリトン各ソロ。混声合唱

歓喜の歌

ああ、私の友人たちよ、このような調べではないのだ！
私たちをもっと楽しくさせ、
そして喜びにみちた調べを歌おうではないか！
(ベートーヴェン)

喜びよ、あなたは私たちの心をどろどろに熔かし
一つに結び付ける美しい神々の火花だ
あなたは平和の樂園からやってきた乙女だ
天国から来た者よ、
私たちはあなたの喜びに火のように酔って
みんなであなたの神殿に昇るのだ

喜びの魔力は、時の流れが、
戦争や飢餓や疫病で厳しく分けへだてた私たちを
再び友人として一つに結び付ける
すべての人々よ、喜びの優しい翼が広がる下で
兄弟になろうではないか

抱き合おう、百万の人たちよ！
この愛の口づけを全世界に贈ろうではないか！

星空の上には
私たちを愛する偉大な父がきっと住んでいるに違いない
なぜなら
あなたは、一人の友の友となる大いなるサイコロの一振りに
きっと成功するだろうからだ
あなたは、きっと一人の優しい女性をかち得るだろうからだ
さあ、みんなでこの喜びの声に唱和しよう
そうとも
この地上でただ一人でも自分のものだと言える人は
大声で唱和しよう
そしてそれができなかった人は
一人泣きながらこの仲間から静かに去っていくがいい

この世のすべての善い人たちも
この世のすべての悪しき人たちも
すべての生き物は
薔薇の花びらが撒かれた歓喜の道をたどりながら
自然の乳房に触れて喜びを飲む

歓喜は私たちに甘いキスとブドウ酒だけではなく
死ぬような辛酸をなめた友を
「彼を救え！」と与えてくれる

精神的な歓喜とは異なり
この世の、肉体的で物質的なありとあらゆる快楽は
ウジ虫のような人たちに与えられる

愛の天使ケルビムは
私たちのために、いま、神の前に立っている！
あなたたちはひざまづいているか、百万の友よ？
あなたたちは私たちを生んだ創造主を予感しているか
世界の人々よ？
星の天幕の上に創造主を探し求めよう！
星空のかなたに、彼は住んでいるに違いない

私たちの創造主である太陽が
天のきらびやかな公道を通って
喜びながら宇宙を動くように
兄弟たちよ、進みなさい

あなたの定められた道を、勝利に向かう英雄のように
喜びにみちて、進みなさい

（構成・訳：都築正道）

みんなで歌おう、春日井贊歌を……

＜歓喜の歌＞

作詩●なかにし礼

The musical score is in G major and 6/8 time. It features ten staves of music, each with a single melodic line. The lyrics are written below each note, corresponding to the pitch and rhythm. The lyrics are as follows:

1. あけ いだ こか そき かオ んト きメ にヲ みカ ちチ
2. あケ いダ こカ そキ かオ んト きメ にヲ みカ ちチ
び工 クタ ヒモ 一ノ かノ ヨ さテ えヲ ぎト るリ
くカ なン んコ をノ こサ えケ てビ すヲ すア 一マゲ
んヨ かニ んン きゲ のン いヒ たト だリ きデ
ふナ みニ 一シガ めデ たキ とヨ きウ わア 二一 れイ
らナ はキ きよ うド だク 一ノ せヒ かト いハ はタ ひチ 一サ
つレ かニ んン きゲ のン いヒ たト だリ きデ ふナ みニ
しガ めデ たキ とヨ きウ わア 一 れイ らナ はキ きよ うド
だク 一ノ せヒ かト いハ はタ ひチ 一サ つレ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高き乙女をかち得たものよ
手をとり歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ